駅

時代と人のドラマが演じられる舞台

市内に七つもの駅が点在するのは香芝市の個性の一つと言えるでしょう。JR和歌山線、近鉄大阪線、近鉄南大阪線が線画を引くように走っています。次の駅、また次の駅へと運ぶのは決して人やモノだけではありません。出会いの喜び、別れの悲しみ、そして希望…と、人々の悲喜こもごもの心を乗せて走ります。人それぞれの人生の一舞台となる駅舎。機能性・合理性を追求する現代でも、七つの駅の中にはどこか昔の面影を残しているものもあるようです。

近鉄大阪線・関屋駅
何かステキな予感が走る駅。

流行のファッションや子どもたちの笑顔の花が咲きます。

かつての駅舎を知る人は、その一変ぶりに一抹の淋しさを感じるでしょうか。それとも機能性を歓迎するでしょうか。

関屋駅は平成三年の改装によって、その外観を一変させました。乗降客の年齢層も、以前なら平日の朝はもっぱらサラリーマンの乗降客が占めましたが、近隣に樟蔭女子短期大学が開校されてからは学生の姿が目立ちます。今では駅に流行のファッションが咲き競い、若いエネルギーとフレッシュな雰囲気が以前にも増して満ち溢れているようです。

週末には観光客がハイキングにやってきます。お目当てはどんづる峯。春や秋の遠足シーズンには多くの小学生たちが嬉しそうに列をなしてやって来ます。そんな人のワクワクする心を駅舎も感じとっているのか、陽射しがさし込む明るい雰囲気の中で、何か楽しい出来事を予感させます。

明るい雰囲気が漂う近鉄・関屋駅

近鉄大阪線・二上駅
みんなが利用しやすい優しい駅。

車椅子の人も、土地に不慣れな人も安心です。

駅に着くと、まず目に飛び込んでくるのが自転車です。駅前の駐輪場には、実に多くの自転車が並んでいます。整然と並んでいる様子が、地域住民のマナーの良さを証明しています。

二年前の交通調査では、乗降人員数は一日四千九百人。周辺の住宅地開発によってその後も利用者は増加し、人の動きが活発に見てとれます。また観光客が頻繁に乗り降りするため、ホームには「金剛生駒紀泉国定公園　付近一帯二上山（大津皇子の墓）南二・五㎞　どんづる峯　南西二・四㎞」という観光案内の看板が掛けられています。

二上駅の特徴は、駅の外から駅職員に連絡がとれるシステムを導入し、身体の不自由な人が階段を通らずに駅のホームに入れることです。

車椅子の人も、土地に不慣れな人も、みんなが利用しやすい駅。市内に点在する駅の中でも、とても人に優しい駅です。

整然と並ぶ自転車が地元住民のマナーの良さを証明

JR和歌山線・志都美駅
人の心を癒す、飾り気のない駅。

のどかな風景に溶け込んでいます。

駅舎が建設されてから一度も大規模な改装がされていない志都美駅は、のどかな風景の中で昔ながらの駅舎の面影を残しています。志都美駅が設置されたのは、昭和三十年十二月。入口付近に建てられた顕彰碑が、駅の歴史を物語っています。

現在、駅の利用客は大幅に増え、朝のラッシュアワーは、とりわけ難波直通の電車に乗り込もうとする多くの乗客であふれます。平成十一年には簡易自動改札機が完備されました。これにより乗客は一秒でも惜しい朝の貴重な時間を節約できるようになりました。

昼間のホームの待合い所はのんびりしたムードが…

駅の歴史を見続けてきた顕彰碑

夕刻になると、一日の仕事を終えて家路に向かう人たちが駅に降り立ちます。飾り気のない駅舎と周りの風景が、その日の疲れを癒してくれているのかもしれません。

近鉄南大阪線・二上山駅
過去の教訓を生かした駅。

人々の安全とダイヤを守るために。

二上山駅がスタートしたのは昭和四年三月のことで、以来、地元の人の通学や通勤などの際の大切な拠点となっています。駅が賑わう時間は朝六時半から八時過ぎまでと、夕方の五時半ごろです。通勤者や通学者が足早に改札をくぐって電車に揺られていき、また帰ってくる―。駅は一定のリズムで呼吸しているかのようです。

週末になると、駅にも違う生活パターンがあります。この駅は二上山への登山目的の観光客が乗降する駅でもあり、朝も早いうちから駅に降り立つ人もいれば、のんびり気分で仲間とやってくる人もいます。

サイクルラインで自転車の移動も楽々（近鉄・下田駅）

平日の朝夕に賑わいを見せる近鉄・二上山駅

近鉄大阪線・近鉄下田駅

市内中心地に建つ機能的な駅舎。

さらに使いやすく、さらに心地よく。

香芝市の中心地に位置する近鉄下田駅。周辺には香芝市役所をはじめ、中央公民館・保健センター・文化センター・総合体育館など多くの公共施設が建っています。

二上駅と構造的には同じですが、ここには平成九年末に大規模な地下駐輪場が完成しました。千六十八台の自転車や単車が収容でき、多数の市民が利用されています。階段脇にはサイクルラインを完備。これは自転車を地下から地上に運ぶための、いわばベルトコンベヤーです。利用者はベルトにのせた自転車を軽く支えながら階段を上り、楽に自転車を持って上がることができます。

駅舎全体が清潔感にあふれ、都会的なムードが漂っています。地上部分で思わず目を引くガラスのピラミッドは駐輪場の天窓。すぐそばにはかわいい花も植えられ、利用者の心を和ませています。

駅から西に伸びる線路は、約一㎞にわたって国道165号と並行して走っています。以前、この線路脇で自動車事故が起こったとか。それをきっかけにトラブルをすばやく察知するシステムが設置されており、二重事故を防止しています。過去の教訓を生かして人々の安全とダイヤを守る心強い駅です。

JR和歌山線・下田駅

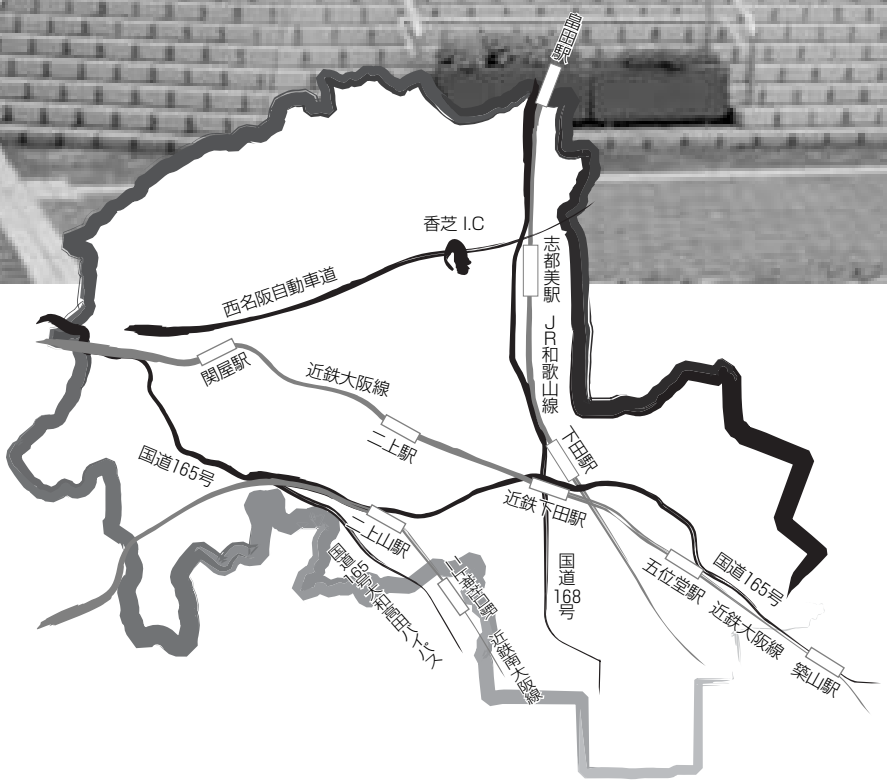
古き良き時代を彷彿（ほうふつ）とさせる駅。

便利さの中に見つけたい、遠い昔の名残。

通勤利用者の利便性がさらに向上（JR下田駅）

奈良県で鉄道の敷設が開始されたのは明治期のことで、明治二十年代には待望の汽車が走り出します。王寺―高田間は、明治二十四年に開通。とは言え、

香芝市の中心的な役割を果たす近鉄・五位堂駅



当時の庶民にとって運賃は非常に高額で、気軽に利用することなどできませんでしたが…。

現在、この地域には新しい住宅地が増えており、地域住民にとって下田駅は生活に密着した欠かせない駅となっています。数年前には下田駅をはじめ、志都美駅、王寺町の畠田駅、大和高田市の高田駅の四駅で難波への直通電車が利用できるようになり、利用者の利便性を格段に高めました。

駅の付近には旧家も建ち、香芝の古き良き時代を彷彿とさせます。待合室の天井がやや低く感じられ、ふと時間をさかのぼったような感覚にとらわれるのは、外観こそ美しく整えながらも、昔ながらの駅の造りを残しているからでしょう。

近鉄大阪線・五位堂駅

市内でも最多数の乗降客が行き交う活気のある駅。

さらに便利に、さらに美しく。

もとはごく小さな駅でしたが、時代とともにその規模を拡大してきました。

およそ十五年前、真美ヶ丘ニュータウンができたことによって利用者が急増しました。昭和六十二年の交通調査結果では、一日の乗降人員数が五千八百六十九人。平成十年の調査では二万三千三百六十三人もの乗降客を数えています。過去何年かの推移を見ると年々、約千人ずつ増加する傾向にあるようです。

昭和六十二年に駅舎がリニューアルされると同時に、急行電車が停車するようになりました。実質的に、今ではこの駅が、香芝市の中心的な役割を果たしているのです。

都市生活の交通アクセスを力強く応援する“今”ふうの建物。市内七駅の中でも、最も多くの人の視線を浴びているからでしょうか。平成十二年には駅舎が化粧直しされ、堂々とした姿を見せてくれています。

香芝市内の七つの駅が利用されない日は一日もありません。来る日も来る日も、さまざまな人が行き交う駅舎―。これからも休むことなく、〈人〉と〈まち〉のステキなドラマの一舞台となり続けます。